

課題 「教師」

「憑依教室」

人物						
藤二春哉	(30)					新米教師
手塚ひより	(11)					藤二の生徒
	(6)					
相羽風騎	(11)					藤二の生徒
秋葉功一	(56)					藤二の学校の校長
生徒A						
生徒B						
その他						

○細山交番前（深夜）

交番の前で警察制服を着た藤二春哉（25）が立っている。人も車も通ることのない静かな時間。

藤二、満足げに微笑む。

藤二「平和だなー」

そこへ暗がりから歩いて藤二の前にやってくる手塚ひより（6）。髪はボサボサで衣服に清潔感はない。

藤二、驚き急いで声をかけようとするも自分を諫めて深呼吸をする。周りを見るがひより一人で親の姿はない。

藤二、ひよりの前でしゃがんで

藤二「こんばんは。ひとりかい？」

ひより「……」

藤二、微笑んでから思いついたようにポケットから飴を取り出す。

藤二「はい、あげる。美味しいよ」

ひより、恐る恐る飴を受け取り、じつと飴を見つめる。

ひより「……助けて」

ひより、飴を握りしめて泣きながら藤二を見つめる。

ひより「……助けて、ください」

藤二、ひよりの手を握る。

藤二「わかった。もう大丈夫だよ」

○ T 「五年後」

○ 伏島小学校・外観（朝）

校門前。桜の木が綺麗に咲いている。

○ 同・校長室・中（朝）

ソファーに向かい合って座っている藤

二春哉（30）と秋葉功一（56）。

藤二「今日からよろしくお願いします」

秋葉「こちらこそ。元警察官という経歴。是

非、教師に役立ててください」

藤二、苦笑しながら

藤二「役立つことがあるとは思えません」

秋葉「そんなことありません。あなたのしたことは立派だったと私は思いますよ」

藤二「懲戒免職、ですけど」

秋葉「後悔はしていないのでしょうか？」

藤二、背筋を伸ばして

藤二「もちろんです」

秋葉、満足そうに頷いてから手元のファイルを手にとって藤二に渡す。

秋葉「藤二先生には六年二組の担任をお任せします」

藤二「はい。勉強させていただきます……え？」

顔を見合わせる藤二と秋葉。

藤二「担任、ですか？」

秋葉「ええ、お願いします」

藤二「しかし、校長先生。自分はまだ新米で

未熟者です。担任なんてとても」

秋葉「大丈夫です。あなたなら」

啞然とする藤二。

○同・教室前・中（朝）

表札には六年二組。扉の前で深呼吸をする藤二。

藤二「問題のあるクラス、ということかな。

望むところだ」

切り替えるように引き戸を開ける藤二。

○同・教室・中（朝）

騒々しい室内に、入ってくる藤二。

藤二「席に座ってくださいーい」

自分の席に座り始める生徒たち。

藤二、教壇の前に立ち生徒を見渡す。

藤二「えーと、今日から君たちの担任となつた藤二春哉です。一年間、よろしくお願ひします」

一番前の席に座る相羽風騎（11）が手を挙げる。

相羽「先生！今年から来た人ですか？」

藤二「ああ。そうです。先生としては新米だけどよろしく」

相羽「いいねえ、よろしくしてやろうぜ、みんな」

笑い声と拍手で教室が包まれる。

藤二、ほっとして

藤二「ありがとうございます。じゃあ出席をとります。

顔と名前を一致させたいから今日だけ呼ばれたら手を挙げてください。じゃあ、一番、相羽風騎さん」

相羽「おいつす！」

手を挙げる相羽。

藤二「元氣いいな」

相羽「俺、ずっと出席番号一番なんだぜ」

生徒A「威張れることじゃないだろ」

生徒B「そうだそうだ」

笑い声に包まれる室内。

藤二が名前を呼び、手を挙げ返事をする生徒。

藤二「えーと次は18番。高木南さん」

シンと静まり返る教室。

藤二「高木さん、高木南さん？」

藤二、顔を上げる。

生徒達は誰も喋らなくなり、真顔で藤二をジッと見つめている。

藤二、戸惑いながらも冷静な声で

藤二「えっと、今日はお休みかな」

相羽「先生、南はもう返事したぜ？」

藤二「え？ あれ、そうだったか、すまない。

聞き逃したな。もう一回だけ頼む。高木南さん」

静まる教室。返事はない。

怪訝な表情の藤二。

相羽「先生、返事してるのに何回も呼ぶなんて、可哀想だぜ」

藤二「……おかしいな。先生には聞こえ」

ひよりの声「(遮って)先生、はやく進めてください。次は私です」

藤二、声の方を見つめて目を瞠る。

無然とした表情で席についている手

塚ひより(11)

○（回想）細山交番前（深夜）

ひより、泣きながら

ひより「助けて、ください」

○元の伏島小学校・教室・中（朝）

藤二、クラス名簿を見ずに

藤二「手塚、ひよりさん」

ひより「はい」

ひより、藤二から眼を逸らして手を挙げながら返事をする。

教室の生徒たちは話し始めて元の喧騒に戻る。

○同・教室・中（夕）

誰もいない教室。深刻な表情で教壇の前に立っている藤二。

ひよりの声「その様子だと、誰も教えてくれなかったみたいですね」

藤二、教室の入り口に眼を向けて。

藤二「まだ帰ってなかったのかい」

ひより「挨拶しないと思って。まさか先生にジョブチェンジしてるなんて思わなかったです」

ひより、教壇の近くの机の上に座る。

ひより「まあ、私のせいかな」

藤二「違うよ、僕が選んだことだ。君が気にすることじゃない。今はどうしてる？」

ひより「児童施設で。みんな優しいですよ。親と違ってね」

藤二、苦笑する。

ひより「ミラクルな偶然の再会は嬉しいですけど。またえらいところに来ましたね」

藤二「…：あれは、どういうことなんだ」

ひより「私が知ってるのは、高木南は四年の遠足のときに行方不明になってるってことです。いまだに生死不明。私は去年、ここに転校してきた身ですから顔も知りませんけど」

藤二「行方不明って…：」

ひより「うちは四、五、六年でクラス替えあ

りませんか。それ以来、このクラスでは高木南はいるものとして扱ってるみたいですね」

藤二「いるものとしてか。なるほど」

ひより「なるほどって。普通納得しませんよこれ」

藤二「世の中は広い。大学を入り直して思い知ったんだ。自分という存在の小ささにな」

ひより、若干引きながら

ひより「まあ普通に気持ち悪いんですよ、このクラス。悪い奴はいないし仲も良いんですけど、高木南の名前を出すとまるで別人になるんです」

藤二「確かに異様だったな」

ひより「面白いのは、話を合わせないと消されちゃうってところですね」

藤二「消される？」

ひより「実際、去年と一昨年、四年と五年の担任の先生は消息不明になってます」

藤二「まさか」

ひよりの真剣な顔に、言葉を飲み込む  
藤二。

ひより「先生たちは怖がって誰も担任なんて  
したくなかった。体よく新米教師に押しつ  
けたんですよ。本当に大人って汚い」

ひより、立ち上がって

ひより「どうでもいいと思ってたけど、私が  
世界で唯一信頼してる大人のピンチなら  
そうもいかないか。この謎、一緒に解決し  
ませんか？」

藤二「……その話が本当なら、今朝僕は君に  
助けられたってことか」

ひより、肩をすくめる。

ひより「助けますよ、何度だって。飴入りま  
すか？」

ひより、ポケットから飴を取り出して  
差し出す。

藤二、苦笑して飴を受け取る。

藤二「いたただくよ」